－ 教育活動報告 －

看護学部における地域住民参画型教育の取り組みと今後の課題
―模擬患者の養成と看護 OSCE への参画支援を通して―

The Efforts and Issues of Community-residents' Participation Type Education in the Faculty of Nursing
-Practice of Standardized Patient Training in Nursing OSCE-

杉原百合子 [1)]，三橋美和 [1)]，小笠美春 [1)]，川村晃右 [1)]，天野功士 [1)]，
野々口陽子 [1)]，田村沙織 [1)]，續田尚美 [1)]，看護学部教員

Yuriko Sugihara, Miwa Mitsuhashi, Miharu Ogasa, Kosuke Kawamura, Koji Amano,
Yoko Nonoguchi, Saori Tamura, Naomi Tsugita

Ⅰ　はじめに

わが国で大学における看護学教育が始まったのは 1950 年代からである。その後長い間，看護系大学は少数であり，看護大学卒業生は卒業時の看護実践能力を問うより，5 年から 10 年後のリーダーを担う人材として期待されていた。1990 年代後半より看護系大学の開設が相次ぎ, 100 校に達する頃からは，卒業時の看護実践能力が課題となり，文部科学省や厚生労働省から相次いで検討会報告書が提示された（中村, 2011, p.2)。2011 年の『大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会』報告書では，医療の高度化や入院患者の高齢化，患者の安全の確保や権利意識の向上，入院患者に占める重症患者の割合の増加，地域における看護の対象の複雑化，さらには臨地実習における実施内容が制限される傾向が生じていることが指摘され，卒業時の看護実践能力の強化を課題としている。

それらを受け, 各大学で看護実践能力の向上を目指した教育が模索されている状況である。本学でも，2015 年の看護学部開設に向けた準備を 2012 年に開始した時期から,「同志社女子大学らしい看護学教育の実践」を目指しており，その基本となったのは,「高度な知識と技術に基づく，多様な看護ニーズに対応できる看護実践能力を備え，医療現場におけるチーム医療に参画できる「質の高い看護師」を養成すること」であった（岡山，2016，p.1)。それを具現化するものとして設置された科目である「看護実践総合演習」では，看護職者としての基本的な姿勢の習得，臨床判断能力の育成とそれに基づく看護実践能力の習得を目指し，1 年次から段階的に積み上げていく形で構成している。具体的には，状況設定のシミュレーション学習や臨地実習で遭遇することの多い場面設定による OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）により，自己の課題を明らかにし自己学習へとつなげることを目指している。

本学看護学部では，OSCE の模擬患者（Simulated/Standardized Patient：模擬患者，以後 SP）として地域住民の参画を図ることを目的として, 開設 1 年目から「SP 支援ワーキンググループ」を設置し，地域住民による SP の養成を実施している。SP とは,「生きた教材として患者役を演じる人」のことであり，OSCE により臨床に近いリアリティを持たせることができるものである。また SP として地域住民の参

1）同志社女子大学看護学部看護学科　2015 年度 SP 支援ワーキンググループ　Faculty of Nursing, Doshisha Women's College of Liberal Arts

画を図ることは，地域貢献に繋がる効果も期待される。本稿では，本学看護学部における地域住民 SP の養成と OSCE への参画支援に関する開設初年度の活動を振り返り，SP 養成の方法と今後の課題について報告する。

Ⅱ　OSCE と SP の概要

1　OSCE（客観的臨床能力試験）とは

OSCE は，臨床に近い環境での実技試験のことで，判断力・技術・マナーなど実践現場で必要とされる基本的な臨床技術の習得を適正に評価する方法として開発された。1975 年に英国の Glasgow Dundee 大学の初代教授 H. Harden らが提唱し，その後，ヨーロッパから北米へと拡大･普及していったとされている。我が国においては，1994 年，川崎医科大学で医学教育に導入され，2005 年には医歯薬系で臨床実習開始前の「共用試験」に正式採用された。

一方，看護学教育では 2001 年頃から大学等で導入されるようになったが，全体的な広がりには至っていない状況にある（中村，2011，p.5）。2011 年に実施された堀込らの調査によると，全国看護系大学における OSCE 導入率は 13%で，「導入を準備中」の大学を加えても 17%という結果であった（堀込・及川・小西，2015，p.47）。現在，看護学教育では，OSCE の義務付けはなく，先述した看護実践能力の強化に向けての取り組みとして OSCE が導入されるようになってきている。中村（2011, p.3）は，医歯薬系の OSCE が「試験」であるのに対し，看護学教育における OSCE は，看護実践能力を「育てる OSCE」と位置づけている。

2　SP（模擬患者）とは

SP とは，「患者の持つあらゆる特徴（単に病歴や身体所見にとどまらず，病人特有の態度や心理的・感情的側面にいたるまで）を，物理的に可能なかぎりをつくして完全に模倣するよう特訓を受けた健康人」と定義されている（植村，1998，p.218）。演習などの学習に参加する模擬患者（Simulated Patient）と，OSCE などの試験や評価に参加する模擬患者（Standardized Patient）の 2 種類の使われ方がある（鹿島，2014，p.20）。

SP は 1968 年に米国の神経内科医，Howard Barrows（1928-2011）が医学生対象の教育に用いたのが始まりとされている。日本では 1980 年代後半から，SP の活用が進むようになり，NPO 法人で SP 養成・派遣を実施している団体や，看護分野でも大学独自で養成した SP をシミュレーション演習や講義，OSCE 等において活用している報告（中村，2001；加悦・安陪・藤野，2008；山本・伊藤・冨澤，2015；井上・山田・南雲，2012）がみられる。SP の導入は再現可能かつリアリティのある学習状況を創り出すため，患者に関わる以前の，段階的かつ実践的学習を促進する教育方法として期待されている（本田・植村，2009，p.67）。

一方，SP となる地域住民にとっても意義ある活動といえる。中村（2011，p.28-31）は OSCE 場面における SP 体験の意義として，①患者として看護援助を受ける体験，②看護教育の方法や内容を知る経験，③自らの存在で学生の反応を引き出す体験，の 3 つを挙げている。また小澤・中村・後藤他（2011）は，高齢模擬患者の養成は，学生の教育への貢献だけではなく，大学の地域への貢献，高齢者の Productive Activity に関与する面もあると指摘する。SP へのフォーカスグループインタビュー調査から，「生きがい」につながる役割意識が芽生えているとの報告もある（鹿島・吉村・吉本他，2014）。このように，地域住民が SP として看護学教育に参画する取り組みを実施することは，学生への効果はもとより，地域貢献としての意義をも併せ持つ活動と位置づけることができる。

3　本学看護学部における OSCE の位置づけ

本学看護学部における OSCE は，中村（2011）に倣い，看護実践能力を育てる OSCE として「看護 OSCE」と名付け，学生が自己の課題を明らかにし自己学習につなげることを目的とした。前述のよう

に本学部では，1年次から段階的に積み上げていく形で「看護実践総合演習Ⅰ～Ⅳ」を必修の科目として設置しており，1）看護職者としての基本的な姿勢の習得，2）臨床判断能力の育成とそれに基づく看護実践能力の習得を目指している。1年次に開講した「看護実践総合演習Ⅰ」の授業目標は，「看護職者としての基本的な姿勢の習得，既習得の知識を選択・統合した臨床判断能力の育成とそれに基づく看護実践能力を習得する」，「状況設定のシミュレーション学習や臨地実習で遭遇することの多い場面設定による看護OSCEにより，自己の課題を明らかにし自己学習へとつなげる」等を設定した。主な講義内容は，キャリア学習，アカデミックライティング，シミュレーション学習，看護OSCEである。看護OSCEは1年間の学びの最終時期である2月に設定した。

看護OSCEは，提示された課題に対して，エビデンスに基づく看護アセスメントとそれに基づく観察や看護の提供を一連のプロセスとして，限られた時間（15分程度）で模擬患者を対象に実施し，模擬患者と教員からフィードバックを受ける，という流れで設定した。さらに，臨床に近い状況設定とし，よりリアリティを持たせることを目的に，地域住民をSPとして養成することを計画した。次章で，SP養成と看護OSCEへの参画支援の実際を述べる。

Ⅲ　本学看護学部におけるSP養成と看護OSCEへの参画支援について

1　SP支援ワーキンググループの設置

地域住民SPの養成と、看護OSCEへの参画支援を目的に，8名の教員で構成された「SP支援ワーキンググループ（以後SP支援WK)」を設置した。本学は薬学部で既にSP養成・OSCE参画の実績があったため，薬学部教員から助言を得た。それをもとに，募集活動，説明会，講習会等を含めた年間スケジュールを決定した。

2　SPの募集

1）募集活動

SPの募集活動は8～9月に，下記の方法にて実施した。いずれも内容は，SPの概要，説明会の日時･場所とした。広報の結果，地域住民25名（京田辺市在住22名，京都市在住2名，奈良市在住1名）からSP説明会参加応募を得た。

(1) 京田辺市役所広報誌への掲載

本学京田辺キャンパスがある京田辺市の京田辺市役所に，広報誌「広報京たなべ」への募集記事の掲載，市役所関連施設への募集チラシの配架を依頼し，協力を得られた。

(2) 本学ホームページでの広報

本学卒業生用ホームページへの掲載および本学卒業生用メールマガジンでの発信を行った。

2）SP説明会の開催

SP説明会に応募のあった地域住民25名を対象に，下記の要領で説明会を実施した。

ねらい：①本学部の教育理念と看護OSCEの位置づけを説明する。

②看護OSCEおよびSPの概要について説明する。

内容：本学部の教育理念，看護学教育における看護OSCEの位置づけと目的，SPとは何かについて説明した。また看護OSCEの流れと，SPの動き，フィードバックの方法について説明した。また，プライバシーの保護，課題についての守秘義務等のSPの心得について強調した。次に，先述した内容をイメージしやすいよう，SP支援WK自作のOSCE場面を演じた映像を用いて，看護OSCEおよび模擬患者の概要について説明した。会の最後に，SPとしての登録意思を確認したところ，参加者全員から登録の意思を確認できた。登録希望者には登録申請書，誓約書の提出を依頼した。

登録者の概要は，男性7名，女性18名，40歳台1名，50歳台4名，60歳台13名，70歳台6名，80歳台1名であった。

3　SP の養成

1）SP 講習会

説明会で SP の登録をした 25 名を対象に, オリエンテーションとシナリオ説明および練習の場として, SP 講習会を下記の要領で 2 回実施した。看護 OSCE に参加する条件として，2 回の講習会参加を義務付けたため，参加しやすさを考慮して，いずれの回も 2 日間開催した。

(1) 1 回目

ねらい：①看護 OSCE の意義と SP の役割が理解できる。

②看護 OSCE のシナリオの流れとねらいが理解できる。

内容:看護 OSCE の概要を説明したのち, 今回のシナリオを提示し, 教員が模擬演技を実施した。その後, SP2 ～ 3 名を 1 グループとして教員 1 人が担当し, シナリオを読み合わせ, 次いで演技の練習を行った。最後に全員で意見交換を行った（図 1。）

図 1　SP 講習会 1 回目の概要

(2) 2 回目

ねらい：①シナリオに基づいた患者役割を演じることができる。

②学生の学習意欲につながるフィードバックができる。

③ SP としてのスキルアップを図り，不安なく SP の役割を果たすことができる。

内容：SP としての活動内容の分析結果においてフィードバックの難しさが挙げられており（鹿島，吉村，吉本他，2014），2 回目の講習会ではフィードバックを中心に講習会を実施した。演技の練習とフィードバックの練習を合わせて行えるプログラムとした（図 2)。まず，フィードバックの方法について資料をもとに説明した。フィードバックでは，学生の演技に対するコメントを，最初に肯定的内容 (positive), 否定的内容 (negative), 最後にまた肯定的内容 (positive) の順番で行うよう説明した (中村, 2011)。次に肯定的な表現について表に示して説明した。フィードバックについての説明後，グループに分かれ（1 グループ 4 ～ 5 名, 教員 2 名), 今回の課題内容を実際に行い, フィードバックの練習を行っ

図２　SP 講習会２回目の概要

た。SP1 名と，学生役の教員 1 名でロールプレイを行い，他の SP は実際に演技をしているつもりで見学するよう依頼した。その後, SP からのフィードバックを実施者, 見学者の順に行い, それぞれのフィードバックについて意見交換を行った。最後に全員で意見交換を行った（表 1)。

表１　SP 講習会２回目のグループワークの概要

グループワーク（所要時間 80 分）
テーマ「実際の OSCE の流れを体験しよう！」
進め方　1グループ　模擬患者 4～5 名、教員 2 名（学生役 1 名、教員役 1 名）
OSCE の一連の流れを全員が体験する。
実施方法
1）演技練習の実施
- 演技者の SP
  ①　学生役（教員）と演技を実施する。
  学生役の演技内容　1 回目：良い関わりの演技
  2 回目：声掛けが少なく、雑な手技の演技
  ②　学生役が振り返りを述べている間に、フィードバックシートを用いて事実と感情を整理する。
  ③　フィードバックシートを参考に、フィードバックを行う。
- 観察者の SP
  ①　模擬演技を観察し、フィードバックシートを記入する。

2）フィードバックの振り返り
①　記入したフィードバックシートの内容を、全員で共有する。
②　感想や意見を交換し共有する。
③　3 段階（PNP）のフィードバックを意識してフィードバックシートを仕上げる。

※教員がファシリテーターとなり、進行する。

4　看護 OSCE への参画

1）看護 OSCE の内容

看護 OSCE は，81 名の学生を 2 日に分けて実施した。課題を実施するブースを 11 か所設け，11 か所同時に課題を実施し，全てのステーションに SP を配置した。各ステーション 7 ～ 8 名の学生が受験し，SP1 ～ 2 名で交替しながら対応した。評価者は教員を 2 名配置した。課題の内容は，「リハビリに行く準備としてのバイタルサイン測定場面」とし，課題は両日とも同様とした。実施時間は 11 分とし，その間 SP は患者を演じ，終了後にフィードバックを実施した。フィードバックは，学生，SP，教員 2 名の順とし，計 5 分間とした。

当日は,SP の体調不良や不慮の事象に対応するため,SP 支援 WK の教員 1 名を,SP 担当として配置した。

両日とも終了後に反省会を実施し，SP からの意見や感想を確認した。

2）看護 OSCE 参画後の SP に対するアンケート

看護 OSCE 終了後に，参加した SP22 名に看護 OSCE に関するアンケートを実施し，22 名全員から回答を得た。看護 OSCE での SP 体験については，全員が「とても良い～良い」と回答した。演技の難易度については,「簡単」55%,「どちらでもない」27%,「難しい」18%であった。自由記述では,「大切な医療者育成に貢献できることを大変うれしく思う」,「学生が患者の気持ちを知ることは大事で，模擬患者としても感じたことを話せるのは有意義だと思う」,「自己を見つめ直し再確認し，自分の視野を広げることができる」,「日常の自分から少し離れ，緊張感を感じたり，想像力を鍛えたりできる良い機会」などの意見があった。

5　SP 活動の振り返り

1）意見交換会

SP 活動に関する 1 年間の振り返りの場として，意見交換会を実施した。登録 SP25 名に案内を出し，15 名が参加した。看護 OSCE における学生の学びの報告を行い，SP 一人ひとりから感想･意見を聞き，全員での意見交換を実施した。SP 活動に関するアンケートを実施した。

2）SP 活動に関するアンケート

意見交換会に参加した 15 名に SP 活動に関するアンケートを実施し，１5名全員から回答を得た。回答者の内訳は，男性 6 名，女性 9 名，年齢は 50 歳台 1 名，60 歳台 9 名，70 歳台 4 名，80 歳台 1 名であった。

SP 応募の動機（3 つまで回答可）は,多い順に「学生の役に立ちたい」60%,「興味があった」60%,「自分のためになる」47%,「社会貢献できる」34%,「人との出会いがある」20%,「学生に患者の気持ちを理解してほしい」14%であった。講習会の回数については,「ちょうどよかった」87%,「少なかった」13%であった。講習会の内容が看護 OSCE での演技の役に立ったかという問いには,「役立った～少し役立った」93%,「あまり役立たなかった」6%であった。今後の SP 活動については全員が継続して参加したいとの回答であった。

3）謝金

SP への謝金については，講習会千円，看護 OSCE 当日三千円，意見交換会千円とし，別途交通費を支払った。

6　看護 OSCE を受験した学生からの反応

1）看護 OSCE 後の学生へのアンケート

看護 OSCE 終了後の学生へのアンケート調査では，看護 OSCE が今後の学習に役立つかどうかについて 98%の学生が「役に立つ～やや役に立つ」と回答しており，また自由記述では，「とても緊張したが，普段の実習室での授業より実際に病院にいるような心持ちで試験を受けることができた」,「実際の患者さんと接しているみたいだったので，自分の今の状態を正確に知ることができた」,「普段学生同士で練習や振り返りを行っていても，甘めの評価や自分たちなりの振り返りしかできていないので，患

者さん役からの率直な感想を聞くことで，相手にとって自分の行動はどのようにとらえられているのかを知ることができ，良い経験になった」,「一般の方から感想を聞けて，これからの意欲に繋がった」など，大半の学生から肯定的な感想が聞かれた。

2）お礼状の作成

看護 OSCE を実施した翌週の「看護総合演習Ⅰ」において，看護 OSCE 内容を撮影した映像を使用しての振り返りと，担当の SP に対するお礼状の作成を行った。お礼状には学生の写真を貼付し，学生がそれぞれに工夫して SP へのメッセージを記載した。

Ⅳ　本学部における SP 養成と看護 OSCE 参画支援の成果と今後の課題

本学部では開設初年度から，試行錯誤しながら地域住民参画型教育の一端として，SP の養成と看護 OSCE への参画支援を行ってきた。本学部における SP 養成と看護 OSCE 参画支援の成果と，より効果的に行っていくための今後の課題を整理したい。

1　SP 養成・看護 OSCE への参画支援の成果

地域住民の力をSPとして看護学教育に取り入れることは,学生,そしてSPとなる地域住民双方にとって有益なものである。まず，学生のアンケートからは，臨床に近い環境の中，適度な緊張感で課題を実施し，看護を受ける対象に近い立場の SP から率直な意見と励ましを受け，今後の学習意欲に結び付ける学生の様子が見て取れた。看護 OSCE の目的である「自己の課題を明らかにし自己学習へとつなげる」効果があったと評価できる。さらに，核家族化がすすみ，世代の異なる対象と接する機会をほとんど持たない学生も多い中，50 ～ 70 代を中心とした年代の地域住民と接する機会は学生にとって，さまざまな対象の思いや考えを知る機会になったといえる。

一方，SP のアンケートでは，学生の役に立ちたいとの思いから SP 活動に参加し，学生に患者の思いを伝え，学生の育成に関われる喜びを感じている様子がみられた。また，自分自身が成長する機会とも捉えており,SP にとっても,適度な緊張感のなかで患者を演じる経験は貴重な体験になったと考えられる。

さらに，教員にとっても改めて地域住民の力の大きさを感じる場となった。講習会での質疑応答やフィードバックなどから，教員自身も自らが持つ固定観念や看護師としての視点に寄っていることに気づかされることもあり，学生のみならず教員も大いに刺激と学びを得られた機会であった。

2　SP 養成の今後の課題

SP 養成の今後の課題として，次の 3 つを挙げたい。まず 1 つ目に，SP の質の担保を図ることが挙げられる。SP の教育は教育側の責任であり（山本・伊藤・冨澤，2015），教員の企画力，準備力も問われるものである（本田・上村，2009，p.73）。本学部では今年度，看護 OSCE における SP の役割が果たせることを目的として，説明会において SP の概要や役割を説明し，2 回の講習会では実際のシナリオに基づいた演技とフィードバックの練習という実践的な内容で養成した。今後は SP としてのスキルアップを図れるような教育を計画していく必要があると考える。ただし，SP からのアンケートでは 2 回の開催回数を適当としているものが約 9 割であり，回数の多いことが SP の負担になることも考えられる。SP の負担も考慮した効果的な講習内容のプログラムを作成していくことが望まれる。

2 つ目に SP にとっても，より意義ある活動となるようにしていくことが挙げられる。SP の担い手の多くは高齢者であり，高齢模擬患者の養成は，高齢者の Productive Activity（小澤・中村・後藤他，2011）や,「生きがい」につながる役割意識が芽生えているとの報告（鹿島・吉村・吉本他，2014）がある。今回の SP の応募動機も，6 割の SP が「学生の役に立ちたい」を挙げていた。また、地域中高年者が社会貢献性のある役割を新たに獲得することにより，健康関連 QOL 向上につながるとの報告もみられる（今井・山川・間中，2008）。SP として参加する高齢者にとっても，より意義のある活動となるために，活躍の場を広げることや学生の学びを結果として示すこと，学生との交流等が必要と考える。

3つ目にSPの活躍の場を拡大することである。現在，本学部でのSPは看護OSCEにおける参画にとどまっているが，他大学では演習や講義等での参画の報告も多数みられる。今後本学部でも，SPを地域住民による教育支援ボランティアと位置づけ，講義・演習におけるアクティブ・ラーニングへの参加やプラクティカルサポートセンター（注）における学生の看護技術自己学習時の模擬患者としての協力等を企画中である。看護OSCEでは，決められた状況設定での助言にとどまってしまうことや年1回の実施であるため，地域住民の力を十分に生かせている状況とは言えず，今後は教育支援ボランティアとして地域住民の活躍の場を広げ，学生が地域住民の生の声や生活を知ることで，看護の対象としての患者および家族をより深く理解し，対象者の思いに寄り添った看護を学んでいくことに役立つと考える。また，地域住民の参加により，学生は演習やプラクティカルサポートセンターにおける自己学習においても臨床により近いリアリティ感や，緊張感をもって臨むことができると考える。

本学部におけるSP養成の取り組みも2年目になり，登録SP数も45名を超えた。今後も学生の看護実践能力の向上と，地域貢献の両面から，効果的な地域住民参画型教育を実践していきたいと考える。

注）プラクティカルサポートセンター；学生，教職員，地域医療従事者の臨床技能の習得・向上を推進することを目的として設置された。主な事業内容は，①臨床技能の習得支援に関する事業，②保健医療福祉における協働と連携に関する事業等である。

文　　献

本田多美枝，上村朋子（2009）：看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察―教育の特徴および効果，課題に着目して―．日本赤十字九州国際看護大学IRR．7：67-77.

堀込由紀，及川秀子，小西美里他（2015）：看護基礎教育におけるOSCE導入に関する検討：全国看護系大学のOSCE導入の現状調査．日本看護学会論文集，看護教育．45：47-50.

今井忠則，山川百合子，間中麻耶他（2008）：地域中高年者が社会貢献性のある役割を新たに獲得することによる健康関連QOLの変化―予備的検討―．茨城県立医療大学紀要．13：83-90.

井上京子，山田香，南雲美代子他（2012）：当大学看護学科における模擬患者参加型授業の実際．山形保健医療研究．15：33-43.

加悦美恵，安陪等思，藤野浩（2008）：医学科・看護学科共同でのSP養成の現状解析と今後の方向性―Advanced OSCEにおける学生SPとの対比―．久留米医学会雑誌．71：199-207.

鹿島英子，吉村牧子，吉本和樹他（2014）：高齢者SP（Simulated Patient）養成の課題．関西医療大学紀要．8：20-26.

中村惠子（2011）：看護OSCE（第1版）．東京：メヂカルフレンド社.

岡山寧子（2016）:同志社と看護学教育～学士課程でいかに看護専門職を育成するのか～．同志社看護．1：1-8.

小澤芳子，中村Thomas裕美，後藤桂他（2011）：学内演習に参加する高齢模擬患者の養成プログラムの評価．医学教育．42（4）：225-228.

植村研一（1998）：Simulated Patient．医学教育．19（3）：218-221.

山本直美，伊藤朗子，冨澤理恵他（2015）：看護技術教育のための模擬患者（Simulated Patient：SP）養成の実際．千里金蘭大学紀要．12：151-160.